

ひとつの火

新美南吉

青空文庫

わたしが子どもだったじぶん、わたしの家は、山のふもとの小さな村にありました。

わたしの家では、ちようちんやろうそくを売っておりました。

ある晩のこと、ひとりのうしかいが、わたしの家でちようちんとろうそくを買いまして。

「ぼうや、すまないが、ろうそくに火をともしてくれ。」

と、うしかいがわたしにいいました。

わたしはまだマッチをすつたことがありませんでした。

そこで、おっかなびつくり、マッチの棒のはしの方をもってすりました。すると、棒の

さきに青い火がとりました。

わたしはその火をろうそくにうつしてやりました。

「や、ありがとう。」

といって、うしかいは、火のともったちようちんを牛のよこはらのところにつるして、いってしまいました。

わたしはひとりになってから考えました。

——わたしのともしてやった火はどこまでゆくだろう。

あのうしかいは山の向こうの人だから、あの火も山をこえてゆくだろう。

山の中で、あのうしかいは、べつの村にゆくもうひとりたびびとの旅人にゆきあうかもしれない。

するとその旅人は、

「すみませんが、その火をちよつとかしてください。」

といって、うしかいの火をかりて、じぶんのちようちんにうつすだろう。

そしてこの旅人は、よつびて山道をおいてゆくだろう。

すると、この旅人は、たいこやかねをもったおおぜいのひとびとにあうかもしれない。

その人たちは、

「わたしたちの村のひとりの子どもが、狐きつねにばかされて村にかえってきません。それでわたしたちはさがしているのです。すみませんが、ちよつとちようちんの火をかしてください。」

といって、旅人から火をかり、みんなのちようちんにつけるだろう。長いちようちんやまのちようちんにつけるだろう。

そしてこの人たちは、かねやたいこをならして、やまや谷をさがしてゆくだろう。

わたしはいまでも、あのときわたしがうしかいのちようちんにともしてやった火が、つぎからつぎへうつされて、どこかにともっているのではないか、とおもいます。

青空文庫情報

底本：「ごんぎつね 新美南吉童話作品集」てのり文庫、大日本図書

1988（昭和63）年7月8日第1刷発行

底本の親本：「校定 新美南吉全集」大日本図書

入力：めいこ

校正：もりみつじゅんじ

2002年12月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

ひとつの火

新美南吉

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>